

乗用ローダ大活躍

低重心 剪定枝の堆肥化に で安全

三陽機器発売

三陽機器(株) (寺前公平社長・岡山県浅口市郡里庄町新庄3858)が今年本格発売した乗用ローダ「JL280」(愛称「せつじん280」)が様々な用途と場所で使用され注目を集めている。広島県の三原市シルバー人材センターが庭木剪定枝のチップ堆肥化施設に導入したのもその一例。先端にマニャフォークを装着することで重い剪定枝の運搬を、広幅バケット装着で堆肥化したチップのすくいや昇降、容器への投入作業などを行い、八面六臂の活躍だ。三原市シルバー人材センターでも「コンパクトで小回りがきき力持ち。作業場でも一台で何役もこなしています」と高く評価する。

三陽機器の乗用ローダ「JL280」も落ちることなく、販売した(株)三谷農機(広島県三原市本郷南6-12の11)は、三原市内と竹原市・東広島市・尾道市の一部をエリアとするクボタ販売店。創業は昭和35年5月で川上征子社長は第4代目。厳しい市場環境の中で同社はここ10数年、売上げ・シェア

また、大型サービステントや7名の整備技能士による充実したサービス体制、益・正月以外、年中無休という営業も強い支持を得ている。さらにリフォーム事業や倉庫・車庫など住設関係を中心とした関連商品に注力している点も強みだ。

理由の一つは、会員数約800名を数える「本郷三原地区クボタ会」という強力な愛用者組織。長年の歳月をかけて顧客との間に築いた絆は磐石だ。

「新たなお客様を探すことより、まず農家や地域が必要とするすべてに対応する」(川上社長)のがポリシーで、三陽機器の乗用ローダの販売もその一つだ。



堆肥場で大活躍の乗用ローダ



三原市シルバー人材センター・宮原正紀常務理事(右端)と三谷農機・松本隆さん

「新たなお客様を探すことより、まず農家や地域が必要とするすべてに対応する」(川上社長)のがポリシーで、三陽機器の乗用ローダの販売もその一つだ。

今回、乗用ローダを導入したのは三原市シルバー人材センター。センターでの庭木剪定事業は、草刈り事業に次いで2番目に大きな仕事で、1060名の会員中、約50名が7班に分かれてこの事業に携わっている。

剪定枝はこれまで1カ所に集めて焼却処分していたが、これを堆肥化する方針が打ち出されたのが今年に入ってから。そのため同センターでは、剪定枝をチップに細断、これに米糠と水を加えて発酵させ、堆肥化する事業として「植木剪定枝葉チップ事業」を今年5月

にスタート、600平方メートルほどの作業場を三原市小坂町に設置している。この間の事情について同センターの常務理事・宮原正紀事務局長は、「CO₂削減という市の環境計画に我々も協力せねばならず、焼却処分代わりのサイクルを模索した。他方、家庭園芸や農業の現場で安心安全な農作物作りが求められており、堆肥需要が見込めるという状況にあった」と語る。

三谷農機ではまず作業場にチップパーを納品し、セットで乗用ローダを推進。人海作戦で間に合うとの声に最初は導入が見送られそうになったが、すぐに全面撤回。「実際に作業をやってみて、スコップで人海戦術なんてとんでもないということがすぐにわかった」と販売を担当した松本隆さんは当時を振り返る。

乗用ローダが活躍する、作業場を松本さんに案内してもらった。山間地にある作業場に近づくにつれ、乗用ローダの快いエンジン音が鳴り響いてきた。発酵チップの堆積と木枠で作った発酵槽の間をスピーディに乗用ローダが往還する。その仕事ぶりは、まさに「大車輪」という言葉がぴったりで、ひと時たりとも休む暇もない様子だ。

作業場において乗用ローダが行う仕事は、①山と積まれた剪定枝を適量ずつチップパーのそばまでチップをすくい一次発酵場所まで運ぶこと、②米糠や水をかけて発酵させたチップの山をすくい木枠で作った発酵槽に移すこと、③発酵したチップ堆肥を発酵槽から取り出すことなど多彩だ。マリあげてしまう。そのあ

ニアフォークと広幅バケットという2種類の先端アタッチメントを使いわけて、乗用ローダがこの仕事をこなしていく。松本さんはその仕事ぶりに目を細めながら、「クローラなので不整地でもわだちを作りませんでも、昇降させても非常に安定している。土が柔らかい場所でも安心して作業ができます。ホイールだとしても土をほす」と舌を弾ませる。

乗用ローダを操作していた人材センター・オペレータ会員の一人も「前後進はフットペダル操作。ローダ操作と左右操作はともに1本レバーと、操作が簡単で楽なのが良いですね。ローダと旋回の同時操作も容易に行えるので、堆肥の移動がスムーズに行えます」と舌を弾ませる。